



常盤木

佐々木信經著

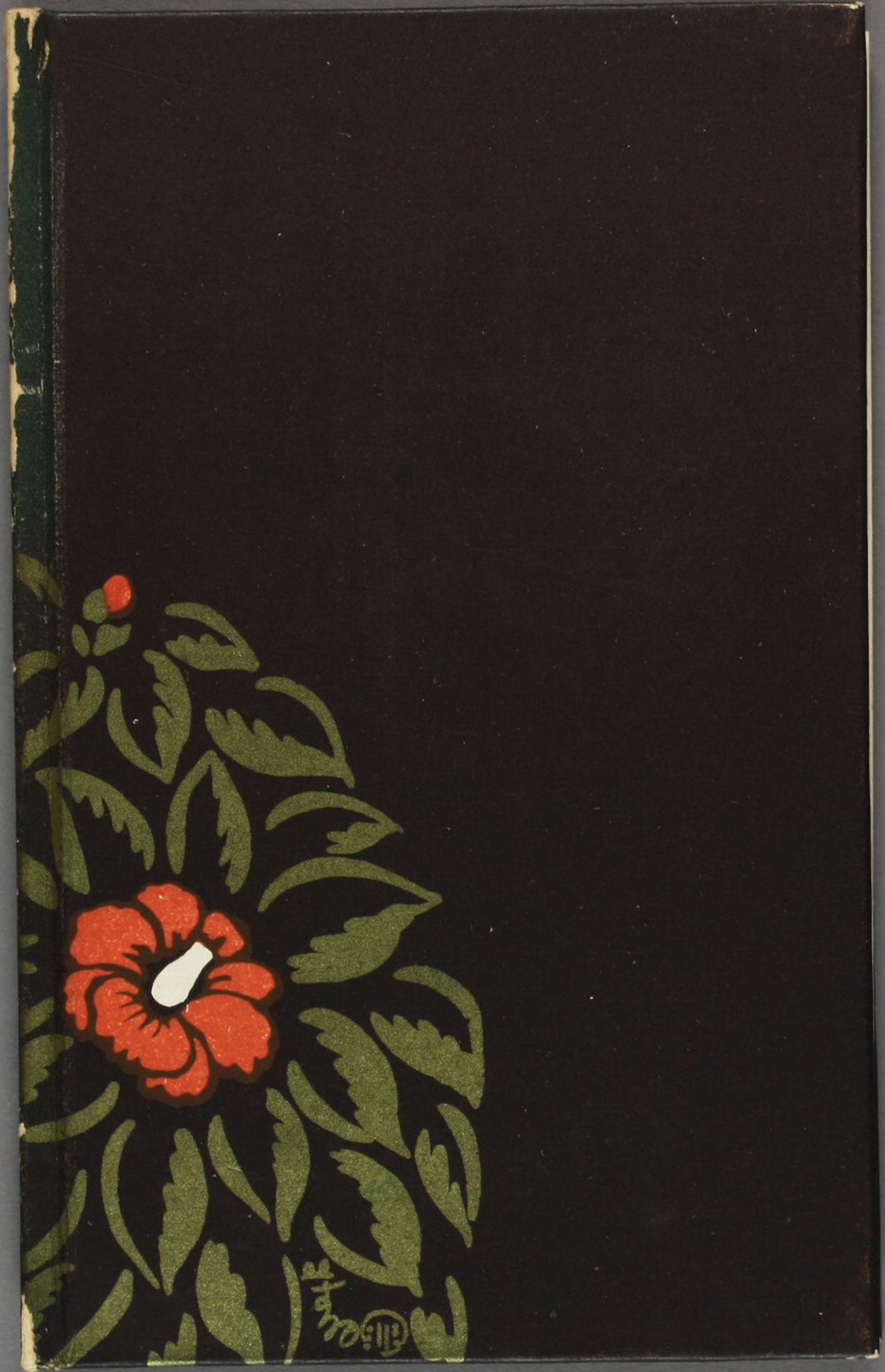


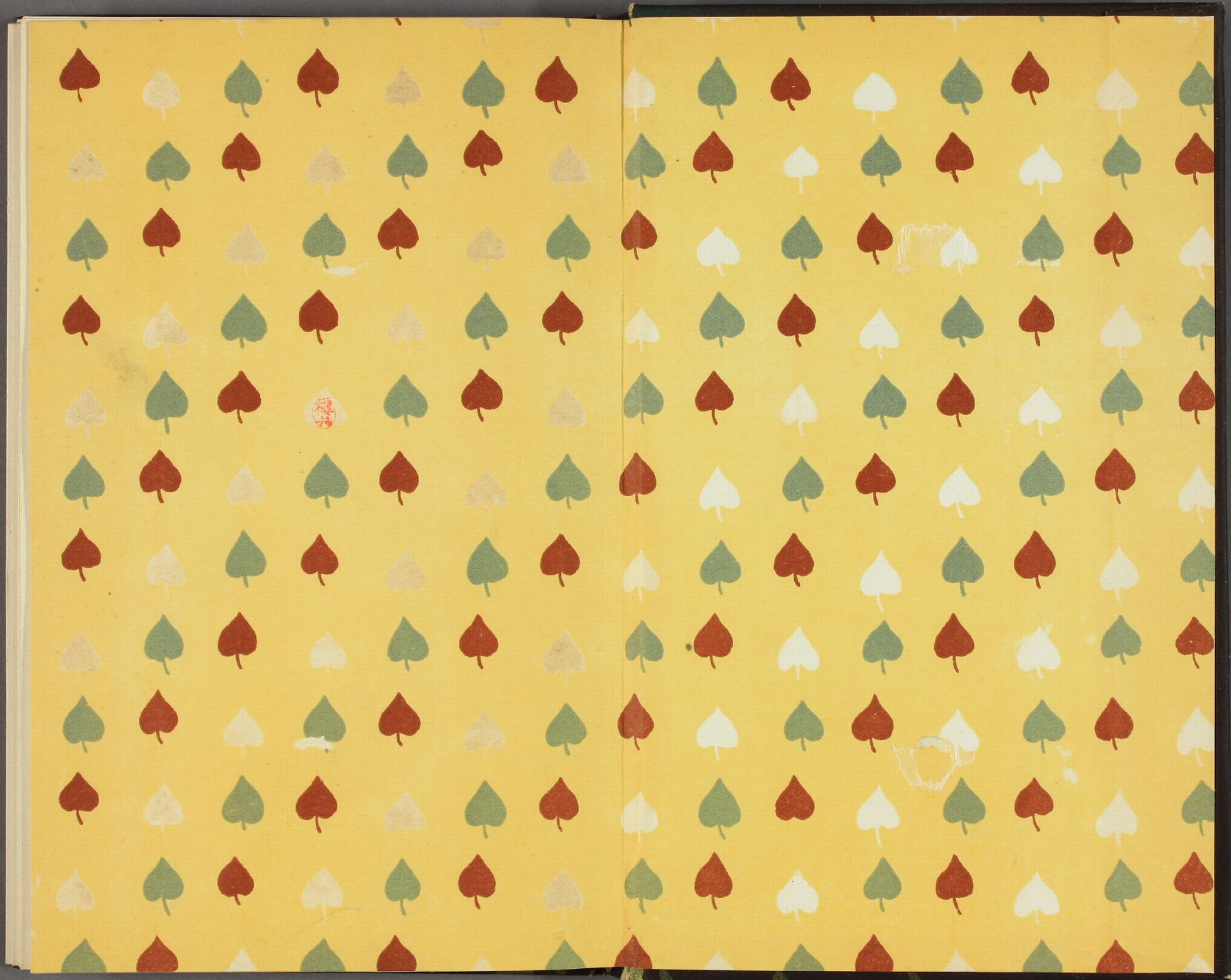
常盤木



常盤本

佐々木信經著





常盤本

佐々木信經著



常盤木 目次

朝の光	一
うぐひす	三
旅	六
枇杷の實	七
初夏	九
蠟燭の火	一五
鎌倉にて	一五

眞向ひなる名越山の松の木の間が明くなつて、月のさしのぼるけはひが見える。南の方に連なつて居る長勝寺山の輪廓も、段々はつきりしてくる。門田には、蛙の聲がしきりに聞える。午前にすぎした東京での忙しい生活とは、全く異つた静けさに、めづらしく落ちついた心もちになつて、さまざまのことが心に來往する。

殊に考へられるのは、自分といふものに對し、また自分の事業といふものに對する反省である。自分は、幼少の時から歌の家に生ひ立つて、歌の

道にたづさはつて來た。これからさきも、固よりさうである。自分は、自分の生涯を、歌に獻げた生涯といつても決して言ひ過でないと感ずる。これまで自分が歌人として經て來た道程は、年月に於いても相應に長く、明治の中頃から末葉を經、大正にわたつて、思ふに、和歌史の上でも、最も變化に富み波瀾にみちた數十年間である。その變化や波瀾にただよひ、又ある時は、些かながらその變化や波瀾を生せしめ、また導く原動力ともなつたこともあつた。その間に自分の歌に對する考

にも變化がある。それとともに、自分の歌風にも變化があつた。否、つとめて變化させようと試みもした。しかし、今日からふりかへつて、自分の成しとげたところを見ると、殆ど不満と失望との塊といへる。いづれもその時々に対応に信ずるところがあつて詠んで來たもので、歌とはかういふものであらうといふ考が、意識しても、また意識せずにもあり、さういふ心もちからおのづから生れ出たものであるが、過ぎ去つて考へて見ると、まだかういふものでもあるまいといふ感じが残ら

ざるを得ない。この感じは自らの歌に對して考へるところであるが、同時にまた、現代の歌壇に對しても、痛切にしか感ぜざるを得ぬ。つまり我人の歌に對して、何となく不満であるといふのが、率直にいふと今の自分の考である。その不満の底には、歌とはもつとほかのものであらう、歌にはなほ開拓すべき境地があるのであるといふ希望の光が、かすかに輝いてゐる。しかし、その希望の正體が何であるかとなると、未だ明らかに之を捕へ得ないし、また説明し得ない。これは結局は、

まうすこし自分が満足しうる歌をよめた時に、はじめて出来るのであらう。かういふ考で顧る時、自分のこれまでの歌のすべてが、ただただ厭はしく見える。併しながら、同時にまた、これまでを昔の自分と見なして了はうと思ふとともに、さすがに新たに生れたいと思ふ自己の前身として、愛着の念も起らざるを得ない。自分が、なほ過去をふり切り得ない不徹底な爲であるかも知れない。しかし、これが偽らない今の自分である。

此頃の自分の胸には、とかくかういふ考がおこ

りがちであるが、今夜たまく〜静かな心に、一層
まさやかに浮んでくるのを感じる。

以上は、某月某日、鎌倉大町の村莊で記した日
記の一節である。こたび歌集常盤木を選んで世に
公けにするについて、そのまま掲げて序とする。

大正十年十二月

佐佐木信綱

朝
の
光

人の世はめでたし朝の日をうけてすきとほ
る葉の青きかがやき

春の日の光の前にわがあればわがいのちこ
そ尊とばれけれ

とこしへの命の前にいくる身ぞしか思ふ時
なみだこぼるる

朝の胸の清くすがしくまむかひに大天地と
むかひてありけり

わが足はしかと大地につきてありつきてあ
る事をよろこびとする

燈ひを消せば俄に明き室外しつぐわいの朝の光にあわた
だし胸

秋空のすみてさやけし珍しう心明るき日に
しありけり

おぼつかなわが此ふめる此土にわが立ちて
あることはまことか

わが心動揺やます秋の風にもまれもまるる
樹木の如し

庭つくり庭をながむるのびらかな心に暫し
われをながむる

芝原にたださす春のあたたかき光おほひて
つと走る雲

尼君はくらき彼方ゆ歩み來てわが立つ前の
戸をひらきける

さいは落ちぬわれ勝ちたりと思ふ時おつる
涙のとめんすべなし

あやまりてすすまむとせしわが前をさへぎ
る影にをののく心

わが心静にひたりたのしまな僅に得たる胸
のよろこび

いくかへり思ひかへしてふみ來つる道なる
ものを何の涙ぞ

むれをはなれ一人秋風の中に立つ心さびし
く嬉しくありけり

われすてて走りいにけるたましひよけだも
のの群にまぎれ入りけむ

いつと知らず心のそこにささりたるとげの
痛をたえずおぼゆる

この思かの思はた誰がならずわが分身ぶんしんと思
ふにかなしき

雑音に心とられて危ふくもわがゆく道をた
がへむとせし

天地の此ゆたかなる中にありてわれ唯一人
などて悲しむ

木の芽ふく木立の青み見つつあれば胸の底
ひに涙にじみ來

悲しきかな心の負債おひかつぐなふに日もこれ足
らずわれを虐ぐ

秋の心いとするとくも胸をさす風ふきやみ
て日のくるる時

真心に信じ得べくは巡禮のむれにまじりて
ゆきかくれなむ

かなしきは自らわれを知れることわが目さ
やかにわれを見ること

われ知らず涙しこぼるゆく春を軽くおぼゆる身の衰へに

むすぼれし心もとけつおほどかにたいさん
木のほふ夕ぐれ

鶯

山すその枯木の道に鶯の來鳴く春べとなり
にけらすや

作事小屋晝の休みの雑談にまじりてうたふ
み山うぐひす

ここにして聞けば悲しなみくま野のあら山
中の鶯のこゑ

さざ波にうつれる君の影ゆらぐ遠音めでた
し森のうぐひす

山あれの恐ろしき日をわななける木立が中
の聲なき鶯

14

みささぎにまうづる道の山松の青きしげみ
に鶯なくも

浅川の岸のたかむらさやさやと鳴りのとだ
えにうたふうぐひす

ゆのやどり川の向うは隣國の町の家並やなみに春
の雪ふる

15

日ゆたかに入海の波ひたひたと岸にさく梅
の四もと五もと

夜ふけ話とだえて卓上の梅のかをりに心し
みいる

波ゆらぐ池のむかひの松山の木間にほひて
春の月いづ

散り亂る思は消えてゆたかなる牡丹の花を
ながめをりけり

巖にも木にも石にもい照る日に春の命はみ
ちあふれたり

われはた心くづれむとすゆく春の雨荒らま
しく牡丹をうてば

ゆく春の丹雲にぐもうつろふ玉川の夕かげ草を見
つつさびしも

かげつくる木立のいくつ心地よき初夏の日
の物語かな

芝生の彼方此方飛びて朝雀餌あさるさまも
夏めきにける

武藏野は榛の木つづく林蔭白き若芽を吹く
朝のかせ

桐の花のあまきかをりぞただよへる五月の
あさの畑のよろしさ

もや深き岸の宿舟ふなべりに三つ四つ並ぶ
あさがほの鉢

丘の上の寄宿舍の窓のくらかりしに燈火み
えて秋は來れり

石垣にいなつり人の棹並ぶ夕川岸の月見ぐ
さのはな

見つつあればありなし風にゆれゆるる薄の
葉かなわが心かな

山峽は日のかげる事早くして穂薄の風うす
ら寒しも

あたりくれて唯まくろなる竹むらのさやぎ
の底にまじる蟲の音

大きうもひろごる投網とあみはま川の月夜の波の
きらきらしけれ

ますますなる電車の道のまむかひにぼつかり
と赤き月のぼりけり

窓あくれば幹のみ見ゆるもちの木の大木の
肌にまつはる秋の日

こほろぎは低き音に鳴く雨をまじへこほろぎと
鳴る風の底ひに

十月も半ばになりぬ夜ふけて仰ぐみそらに
星ひややけし

くらき空に十日ばかりの月出でたり夜さむ
の風にふかれて歸れば

此夜らの寒さしみとほる土の底に歎かひう
たふこほろぎはあはれ

日毎かよふつぎ櫨の並木の朝の道日ごと落葉の
しげく成ぬる

何の鳥か鳴かであなたに飛び去りぬ大竹村
のくろみさむけし

かなりやがよく唄ひけり朝の日は南天の實
にかがやきにけり

24

朝の雨寒くふるなり親離れまもなき鳥か聲
ひくう鳴く

窓近き青桐の實のからからとからからと鳴
る寒き夕ぐれ

しとしとと雪つむ音の心よさ時計を見れば
夜いたくふけたり

25

とけがたの雪の雫にぬれ光り枯木のひまに
白き月みゆ

旅

夢遊記
卷之三
遊江都府
遊金剛山

薬師寺はついでのかげをまがりゆくつるば
みのきぬの寂しき初秋

なら山の高きに立てば青によし月夜の奈良
のみるにしづけし

供養をへて吾が大佛を仰ぎ見し佛師のまみ
にみちけむ涙

奈良の秋は夕ぐれ早ししめやかに南圓堂の
鐘がひびき來

ならの京老木の杉の秋雨にを鹿も我もぬれ
にけるかな

小法師が大き鍵もち扉明くる音のきしみの
うすら寒しも

ふゆ近き薬師寺の道うすき日はついちの上
の雑草にさす

山高き佛陀の浄土ふみながら後世をおもは
す花を執する(高野山二首)

わくらはに値遇の縁を結びつつ猶夢さめで
山下りけり

朝寒し八坂の塔の北側にいささか残る元日
の雪

春風の三條四條ゆふぐれを旅人さびて歩み
けるかな

とつぐ子をともなひつれて春風の賀茂の川
水見らくよるしも

山ばなの平八茶屋の若楓はつ夏は魚のあぢ
はひのよき

静かなる京の朝かなついひぢのびなんかつ
らに小鳥うたへり

燈籠とろうの火一つ消え又一つ消えて波ひたひた
にふけぬ秋の夜(殿島)

古への人を戀ひしみ觀世音寺うしろの山に
藤の花をりつ（太宰府）

秋風の湖北の村におくて刈る少女が遠をちに光
る手賀沼

山脈なみの海にと走るみんなみの相模の國を秋
風にゆく

見さくれば武藏ひろ原くれしづみはるばろ
に白し多摩の流の

片瀬川初夏の潮ひたひたとよする汀をはな
るるわが舟

高嶺そめみづうみそむる秋の日の光の中の
島の上の宮（箱根七首）

湯あがりの廊下を歩む身のほてり遠くにひ
びく山の風かな

夜まはりの拍子木が遠く消えにけり山のゆ
の宿の秋の夜のひえ

二子の嶺日毎むかへば汝なれも亦われに語らふ
ことある如し

二子山麓の道のささ原のさやさや鳴りて霧
まき來る

いつまでもいつ迄もわが舟を見る寂しきか
秋は湖畔の女

立とまり見かへれば闇の大底のまくろき中
の青白き湖うみ

はんの實の一つを手にとり手にのせてしみ
じみと見てつひに捨てける（油壺四首）

わが前に青き海こそひらけたれ麥畑かをる
坂をのぼれば

麥畑は風に浪うつ眼の下の細き入江は濃青
に眠れり

海に来て猶林こそ戀しけれ手ににじみたる
松やにの香に

波にまかれよせては返す磯の小石音のさむ
しも日のくれゆけば（伊豆山）

ゆれ走る乗合馬車の慕うちて天城おろしは
はたはたと鳴る（長岡温泉二首）

細り立てる葉なし桑畑風寒み遠山並にあか
し夕日は

時雨日の雲間もる光つよくさしぬ枯草色の
山の一角（日光四首）

大崩なきの大き斜面の一ところのこる雑木は真
あかにそめたり

大平ちりつくしたる白樺の木立のひまのつ
めたき夕日

山おろしさとおろしくればちり亂る木葉が
中にただよふ心

遠つ祖の土を親しむ人すませ古き驛にねむ
れる家（坂本）

から松のかげふむ道のやはらかみ遠世のわ
れにあふ心地すも(輕井澤五首)

見おろす澤の木立のこもり深み時鳥ならむ
鳴きて過ぎしは

みどりうかぶけやきの澤の朝雨に山鶯のし
ばしば鳴くも

夜空白しひくき本草はことやめて靄ごもり
をり高原も丘も

夕空に照りかがよへる火の山の姿たふとみ
をろがみにける

湯のやどりかどにつるせるから鮭のうろこ
に寒き山の冬の日(鹽原)

さらさらと山窓をうつ霧のおと薄が中のま
しみづの音

何おもひをりやと山の鳥が来てわれに語ら
ふ静けき晝かな

提灯の火が少しばかりさきになりて野菊の
花が照らされ居たり

つみあげたる石炭の黒さ時雨日の山のつめ
たさ黒き山北

湯づかれのたるき心に眺めるぬ前の川原の
石ふむ小鳥

今一度湯にあたたまりいねやせむ旅の秋の
夜のさびしかりけり

湯のしづくこりてつめたう肩に落つ湯ぶね
の外の山は雪ふる

ぼうと鳴る船の汽笛がこだましつ漁村のう
らの冬がれの山

わらやねのわらさしかふるちりほこり明る
き晝の静なる町

ほのぐらき常燈明にゆきすりの人のおもわ
の似たるおどろき

夕されば山霧おりてかや原のかやの靡の音
かそけしも

風にゆらぐ山一面の薄の穂空の緑は静かに
もだせり

ぬば玉の入江にうつる山やけの遠き明るさ
人のこひしさ

たまたまに障子明るき家あれば嬉しかりけ
り寒き夜の旅

48

山村の朝の停車場四五人が猶ふる雪をみつ
つ黙もだせり

寒げなる親子は夜の汽船まつ渚における五
六の荷物

かけす鳴く夕山道の落葉みち旅の心の寒く
かなしき

49

橋ぎはの青物市のにぎはひに家鴨もまじる
朝の雨かな

むしろ帆を山風あふり湖岸のゑにすの若葉
葉裏かへるも

おごそかに黒き山脈そそり立つ星高光る夜
のしじまに

うねうねせる野道をここにつくまでにいる
いろのこと思ひてこしかな

夜の浪石垣をうつすたれたる湊の町の寒き
ともし火

今日の旅大竹村にぼつかりとさける椿が目
にのこりけり

高原の秋の夕日は涙さそふ白樺の幹片あか
りせり

夕されば川の千鳥が来てあそぶ小松が原に
みゆる赤き實

みづうみにむかへる窓のうすあかりしらじ
らと夏の夜はあけにけり

蛇とぶや山あぢさゐの花影を苔にゑがきて
薄き日のさす

鳴りとよもし發動船はいでゆきぬ磯山椿花
のしづかなる

いづこにか人の聲すも春の日の霞める磯に
まどろみをれば

大店なのからからと大戸おろす音霜夜の月に
ひびきて寒しも

友とくみし別の酒のほのぬくみ汽車は雪の
廣野を走れり

遠つ世に一人まづすみ五つ六つの家かもな
りし雲ゐる山里

なまぐさき磯濱すぎて磯山の松の木の間
に
なりぬ月夜は

鳥が飛ぶ一日二夜を吹き荒れてしかすがに
風もよわりたる朝

まじまじとわれをながめて風の如つと林間
に走せ去りし女

松かさを手まさぐりつつ松かげにくるる海
みる唯一人かな

裏のまど明けて見たればそば、畑の花ほの白
う暮れのこりけれ

濱川によりて眠れる老舟のやせし肩ふく秋
の風かな

一しきり雨また来る江の上の山の蒼蔭あをかげとゆ
れかくゆれ

遠々し刈田の中の一筋の道を遙けみ風の寒
しも

目をつぶり海の音ききてありし程に白帆い
くつも生れこしかな

海の夕日山にを照れば山上さんじやうの老楠の幹光り
にはへり

みちのくのあたたら山に紫の名知らぬ花を
あはれとは見つ

くらかりし林はつきて山峽の此みのり田の
黄なる明るみ

海の音のとどろき暮るる小松原旅人のむね
は春もさびしき

高山のいただきに立てる此心言きはまりて
ただ涙おつ

山の家雉の子かへる金あみの上にくつも
おちたる松かさ

のみ口をきればよき香のさと走る酒庫の外
の冬の雨かな

畑中に芝居の幟ひるがへる百舌が鳴く音も
長閑けき真ひる

夜舟つきて一とときに客の込みあへる船宿の
秋のくらしき燈火

屋根高き倉庫の前の堀川の水黒うして秋ふ
かみたり

山の湖うみの底に沈める大木たいぼくのしづけさに居り
一時の胸

濱川の岸の粟畑粟の穂の片靡きする星あか
りかな

さ霧ふる九月の朝の薄らびえしみじみと人
の戀しかりける

いたましさ雪げのそらのうすら日にてらさ
れてゐる山の赤はだ

星寒し木枯すさぶ山すそにかたまりあへる
七八つの家

薄ぐらき雲の下なる高山の山なみを見るさ
びしき心

さわがしき月參講の一むれにまじりてもの
をおもふ旅人

さびしらに野にひとりある老いし樹のいき
づきたてる秋風の中

おもふ人もあらぬ旅なり湖うみぎしのしめれる
土をなつかしみふむ

風光る大竹原の夏の日によきくまつくり遊
べる小鳥

こきあるの海のさびしさ物おもふわれに何
ともいはぬさびしさ

燈火に物を思へばをち方の海なりの音のか
なしき夜なり

枇杷の實

よざされしわが道をゆく春の日の心うらら
に心ひろらに

故郷の能^の褒^ほ野は草の青むらむ近江境の山も
霞むらむ

歌おもひ日毎よりましし文机にわれはたよ
りてここら年経ぬ(先考三十年祭二首)

忍べば心ぞかよふ父の世とわが住める世と
へだたりあれど

うぶすなの秋の祭も見にゆかぬ孤獨のさが
を喜びし父

68

見るにつけて涙しこぼる亡き母は短き糸も
かくはつなぎし

生ける文字か死せる文字かもよみぬたりし
書をふと閉ぢて疑ひにける

紙きりつつ新しき書よみつづくる今宵の心
しづけく樂しも

69

あざやかに秋の日はさす此朝の筆のすすみ
の心地よさはも

ひねもすを書に勞れし目にしみるベコニア
の花のよき紅あかさかな

わが巢つくと蜂は専念にいとなめりわれ
はた今日も筆とりくれぬ

夜ふけぬらし崖がひした下の家いねしづまり筆もつ
手さきしびれおぼゆる

指さきにしみえる寒さ悲しくも文字に使は
れ猶筆をとる

解わかき得しが嬉しくてわがしるす文のおのづ
から他ひとの爲にもならむか

めづらしく歌心わく夜なりけりさはあれ明
目の講義を思ふに

つかれはて歸り來りて食まはりくひし夕けの後
のただに眠たさ

仕事終へ今はも安きうつそみの身をよこた
へて心さびしも

手に足にくひいる強きくさりあり心一つは
大空ゆけど

わが妻もわが子もいとしさはれ此一人のわ
れもいとしかりけり

やごとなく心はもたりしかれども此世にし
ては乏しくぞすめる

ぬかるみにわが足なづむ戀ひ仰ぐ天つ大空
は遠くはるけく

吾子も亦わがふみし如きさかし道ふみもや
すらむすこやかなれ吾子

萩が花のこぼれ花拾ふ子らにまじりわが庭
の秋をよろこびにけり

いささかの物に喜ぶ幼子をみればかはゆく
かなしくおもほゆ

庭の枇杷赤らみにけり末の子がかく文やや
にととのひ來けり

わが歌ぞわが命なるわが歌ぞわが涙なるわ
が血汐なる

わが天地せばくしありけり然れどもわが天
地は楽しくありけり

われはしも嬉しきかもよ現し世にわれはし
もわれのあるじなりけり

敷島のやまとの國をつくり成す一人とわれ
を愛惜まざらめや

人の世の物みな亡ぶ然はあれど亡びざるも
の天地にあり

初
夏

初夏の若葉のかげを歩みつつまさびしきわ
が心なりけり

青葉かげ雪のやうなるきぬ着たる初夏人と
物がたりける

やはらかに初夏の日ぞうるほへる風少し吹
き動く若葉に

いね足らず頭重き朝の此朝のくもり日にし
て風なきあつさ

四五人が送りに來たる初秋の電車の道の薄
月夜かな

雨をもつ風荒らましく吹きふけば本草と共
にもまるる心

池にそひてたでの花さく我が心ややおちつ
きて九月に入りぬ

から橋の上ゆ眺むればけぶりの色木立の色
も秋としなれり(西片町)

都こそうつくしかりけれ秋の夜のさ霧にぬ
れてにほふ燈火

ただよへる夢のやうにもたをたをとこすも
すは咲きぬ曉の庭に

新しき家ゐに我を見出だししわたましの夜
の清き月かな

道を歩む心あかるし月赤く大きくいらかの
上に出でたり

めづらしう宵寝してとくめざめぬればそと
は明るき月夜なりけり

わが前の物のすべてがなつかしき眼してわ
れみる月の夜なれば

悲しきかな明るき夜道歸り來つつ月夜とふ
事も忘れてゐたり

秋の夜の澄みしづもれるわが胸に通ひなづ
さふ水の音かも

久方の天つ星むらまさやかに光りかがよひ
夜は沈みたり

秋風の近江の國の山寺にありといふ友よ涙
かわきしや

うす寒き秋の夜風にまたたける蠟燭のの火
悲しき涙

堀わりの水にすぢひく幾つの燈あきの夜寒
を獨歸りく

靈雲寺大木おほきしづくす星白き雨のなごりの十
月の夜

小春日の郊外の道めづらしく遠く歩み来て
かわきをおぼゆ

さくさくとふめばくづる霜柱わが世もか
くやくづれむとする

春は來ぬ春來れりといふことがしみじみと
胸に嬉しかりけり

初春のこの天つ日のもとにしてわが大君を
たたへまつらく

しみじみとわれをよろこぶ庭の木に小鳥が
うたふ朝の一時

牡丹など咲くかのやうにほの赤うもやぞ匂
へる初春の夜を

かしこきや天つ心をよろこびてゆたけき朝
の日にひたるかな

ひえはてし土の心にあたたかうしみいる春
の光のたふとさ

やはらかに春の草もゆすさみたるわが心こ
そ悲しかりけれ

おぼろ夜の月ほの白き夜の町を遠く歩みき
ぬ軽き心に

のびらかな心になりて春の日の堤の道に草
などつつみけり

若き日のゆめは浮びく沈丁花やみのさ庭に
香のただよへば

柏木はかりそめ建の貸家のあなたこなたに
春の風ふく

書とづれば夜の戸うちし雨の音も間遠にな
りぬ静かに眠らむ

やうやうに心おちゐて庭におり花壇の花に
水などやりぬ

白雲は海のむかひの山にうく此夕ぐれのお
だしきころ

新しき吾にを吾の生れなむ過ぎし昨日を戀
ひて何せむ

空仰げば長閑に雲ぞただよへる人の此世の
しづこころなさ

夕風にほろほろおつる松の花淡き愁の胸に
しむかな

ふふむ光たもてる相すがたひとひらの木葉にこも
る尊き命

92

きはみなき大わたつみに立つ浪のしぶきの
中の一つにもしかず

故なくて生れこし世にあらざらんさは故な
くて去らじとぞおもふ

いづこより成れりし罪ぞ因や果を生みし然
あらず心まどひぬ

93

正しきはいづれぞ或は二つながら正しくや
あらむ否さにはあらじ

あざむくも相争ふもおのがじしの生きねば
ならぬ悲しさの爲

おのが身のいたはしければ青き木に宿れる
蟲は青き衣きる

さかしらに昨日はひとを誠めつ今日の愁を
われいかにせむ

門の邊に道をとふ子よまことにはわれも道
をし知らぬかなしさ

風はやみて天地今し静なるねむりに入りぬ
ともし火けたむ

すなほにわが詞をいれてうなづける姿いと
しくかなしかりけり

勝ちて歸るそれもおもしろまけて歸るそれ
もおもしろ何もおもしろ

思ふ事思ふがままに言ひ出^でがたき苦しみも
ちて庭に向ひ居ぬ

96

わが心神依板のよりよりにかそけきひびき
たてはたつれど

丸き石組合せんと徒らに心つからしいく自
をありき

ますらをのかかるはかなき事しつつ命の一
日くれゆくものか

97

この心かたくなにしてうつしがたし人の情
を嬉しときけども

おぼつかないづこにむかふ道ならむ果なく
白くつづく一すぢ

皆きえぬ昨日も今日も一昨日も砂につけた
るわが足あとは

むきだしに見しわが影の獸けものの如痴者うつけのさま
なるに涙こぼるる

われと知るわが胸の疵に手ふれられ又今更
にうづくくるしび

何せむに長らふる世と思ひ見てあつき涙し
わが頬流るる

みにくかるわれをいとしみいきどほる心た
もちてもだしをりけり

淺ましくくらき心の片影をふとかへり見て
をののかれぬる

あまりにもわづらはしきに人ごとのやうに
も思ふ思ひあまりて

いつ迄か此たそがれの鐘はひびく物皆うつ
りくだかるる世に

狂ひたる時計が猶も動きやまでたがへる時
をさせるさびしさ

大空の青きを見つつ眠りをり物思ふにも倦
みし此頃

露霜にしなえうらぶれわが心遠き旅より歸
り來にけり

ほのぐらきみ堂のおくにしづもれる古き靈^{たま}
かもわが目にみゆるは

犠牲^ヒといふかなしき詞いつの世に誰かもか
かる詞つくりし

天つみ神わがした心しろしめすあざけるも
のにあざけらしめよ

何をかいふ傍ら人よ天地にまことにわれを
知れるはわれぞ

何かあらむおとなげなしと且は知りて憤る
こころなきにしもあらず

かたはらを見れども見れど心皆ことなる國
に住める人なり

たなそこの鹽なげ入れてみづうみを鹽海と
せまく愚かさにをり

わが姿ならじかと心をのきぬ塵にまみれ
たる街路樹見つつ

ちりひぢの中にかくとせまみれたるわがた
ましひの聲たてて泣く

われ未だ生きてあり生きてありと嬉しみ思
ふわが手さすりて

今日までのわれてふものを亡ぼして悔いざ
る心嬉しとし思ふ

此今の心のあかるさ天の下の物のすべてが
いとしかりけり

おもちや箱あけたる如も年月のわれてふも
ののここにちらばる

やみてあればわが家のうち暗くさびし幼な
はらからいさかひもせず（病床作）

夢の國にばめる木々の枝たれて暗き小道を
わが心ゆく

病みふせる一日のながさ雪もよひ終にふら
ずて暮れぬといふなり

雪ふりてしづけき夜かないたづきに妄念き
えてやすけき胸かな

図書館のかの階上の窓近き梢は今も動きて
やあらむ

やみぬれば心清らになりぬるか後の世の後
もまさやかにみゆ

窓の障子に朝の光がゑがきつる木の影もき
えつ病める日の長さ

玉ゆらは清き心にもだしをれどうつそ身は
猶も苦しくわびしき

ふしゐつつしみじみと見るわが指のなつか
しきかな弱れる心に

堪へ忍び言に出でじと思へどもいたきかひ
なの痛きなりけり

いたむ肩いたむかひなもわがなればわれと
いたはりさするなりけり

やはらかう物いふ人もまじりたる朧月夜の
三四人かな（月二首）

さだすぎて^{わざ}技に老いたるうたひめが酔物語
かなしき月夜

天の川きらめく夜の薄ら冷え暗き廊下にあ
ひし横顔（夜三首）

寒き夜の月の砂山松のかげと君が影とに我
もまじりし

おそろしき夜なりしかなわが心あやふかり
つる夜なりしかな

ともし火をまもりて思ふ追ひがたきわが若
き日のまぼろしのかげ（燈二首）

恐ろしき魔やうかがふと秋の夜の燈ひを明う
して物語るかな

若草の岡邊の道にのぼり見れど君が姿の見
えすもあるかな(岡三首)

やはらかうおちたる椎の花ふみて岡の小道
に人をまちけり

砂山の眞白き丘にたたずみて歸らぬ舟を待
ちつかれる

もだしつつ共にぞゆきしますぐに海にいづ
る道の椿さける道(海二首)

ぶさまにも瓦斯のタンクのすわりをるかた
はらの海に舞ふ鷗かな

山の家椿の花の咲きつつむ中より君がのほ
りこし朝(椿二首)

つきほなくいひそそくれてもた黙しをりはたと
おちたる白玉椿

恐ろしき事ふと胸に浮びたる後の心のうら
寂しけれ(心四首)

人の世こそ悲しかりけれいつよりか相そむ
きにし心と心

燭の火を明くせよとく明くせよ暗ければ心
狂はんとする

蟲ばめる心の木こそ悲しけれおとろへにけ
り一日一日に

われは今われをぞ見たる悲しくもよろほひ
まるぶわれを見たりき(悲二首)

とつぎにけり世を早うしけりうつそみの現^{げん}
世^せの人は悲しかりけり

相見つつ涙ぞおつる灰色のもやの江をゆく
二つの小舟(涙二首)

泣くをやめよ此二年のおもひ出に涙の顔は
さびしかるべし

にくむべきあたかたきには生れてもおもふ
といふは神もゆるしき(思二首)

湯あがりのあまき勞れに忘れぬし人のこと
などふと思ひけり

窓前の樹もみぢせずして落葉すいひ出でず
してとはに別れし(別二首)

店さきを買物をして歸る如わかるる事を思
ひけらしな

大空は秋風たかし何處にか失せにし夢の行
方たづねむ(行三首)

秋風のすそ野の道を一人ゆくそこなはれた
る心いだきて

甲斐の國の友來よといふ今もかもかけらひ
行きて泣かまほしけれ

月白し歸りもやこんいく千里遠くさかりし
人のこころも(遠三首)

ふときけば再とつぎ遠き國に今ありといふ
いとほしきかな

な近よりそいとも危ふし遠くるよ二萬里ほ
どの遠さにをゐよ

よみ終りていと平凡に終りたる小説のごと
あへなかりけれ(小二首)

あくまでも小さきわれを示しつる其事のみ
を恨としおもふ

二三步をいつも退きさかしうも用意してこ
そ物をいひしか(退二首)

聲高に言擧す世なり退きて獨靜かにわが道
ゆかむ

蠟燭の火

〇三〇

蠟燭の火は、燃焼する時に、光と熱を放ち、同時に煙を発生させる。この煙は、空気中の酸素と反応し、二酸化炭素と水蒸気となる。

また、燭芯は、燃焼によって炭化し、最終的には灰となる。この過程は、化学反応の一例として知られている。

燭の燃焼は、エネルギー変換の過程であり、化学エネルギーを光エネルギーと熱エネルギーに変換する。

この現象は、日常生活でもよく見られるものであり、その原理は、科学の基礎となる。

燭の燃焼は、環境にも影響を及ぼすため、その燃焼過程を詳しく理解することは、持続可能な社会の実現に役立つ。

天よりか魔の國よりかゆくりなう來し人に
しも思ひしみにし

水無月の青すが山のすがしがし君がゑまひ
にむかひてあれば

海みれど山にむかへど海は山は我につめた
しただに戀しも

何故の涙と知らず君が目に見し彼日こそ嬉
しかりしか

ほのかにも蠟燭の火のまたたけば面影人も
歎きけるかな

しみじみと君が見まもる夕空を見つつあれ
ばわれも寂しきものを

しきりにも木蓮の花のちる日なりわが思ふ
人にさはりあらずな

いと切にかくもわりなく戀しきはわが死ぬ
時の近づきぬらし

われ死なばいつより病みていませしと常人
さびて君もとふらむ

此歎誰に訴へんたそがれの落葉の道はくれ
はてにけり

よききぬをもたるが如もいくつもの心もち
たる君にしありけり

悲しわれ國を追はれし人よりも君が心のよ
そになりぬる

半にていひさしてまた外事の話などするか
なしき日かな

われはわれの勝利者なりき然れどもいとも
悲しき勝利者なりき

後の世は必ずあらむ然らずばさらすばあま
り今のかなしき

まさしくもきくに堪へんやいとせめて偽を
だにひとのいへかし

かの夕べ挿話めきたる物語さも何げなう語
らひしかど

春の夜の星のやうなるまなざしの悲しくも
あるかとはに別れし

彼の日猶死なでをありきわが心われあざむ
きし戀なりしかな

悲しきはわれかな心いつ迄もかへらぬ影を
執し歎きぬ

いつまでか過ぎにしゆめのあとを追ふ昨日
の人は昨日なりけり

なつかしさふと見るまみはそのかみの君猶
今もいきてありけれ

その頃とおもひいづるにかなしけれ櫻のし
べがほろほろとちる

おもかげもうすれざまなる今にしてただに
戀しきひた心はも

鎌倉にて

くろかりし山松のひまほのあかみしばらく
にして月はのぼれり

滑川やみ夜涼しき川口に長谷のあかりをな
つかしむかな

海の音をりをりきこえ月はすみて此夜の心
おだしく安けし

垣の上の向つ松山風立ちて潮の遠音のとど
とどと聞ゆ

門田の稻重みふしたり秋の日の黄なる夕日
はやはらかに照る

微風そよかぜのかよふ夕庭におり立ちて唯一人なる
われを喜ぶ

星の光しづげき夜かな庭の眞萩ゆり動かし
し夕風はやみて

ゆり椅子の身のゆりゆりに心地よし朝の光
にひたりてあれば

門を出でてみやる稻田の青みくらく今日の
一日もくれんとすなり

山の上にはきはだちたてるいく本の高松の間
を月にはなれぬ

若萩の枝の間くぐりくぐりあきて垣根にし
ばしとまれる小鳥

水色の空のここかしこ白き雲のうきただよ
ふもめでたし秋は

ほろほろと赤き實いくつこぼれおちぬ垣に
まつはる枯蔓引けば

蜜柑むけばちらばるかをり心地よき朝の座
敷の日の光かな

松山の木の間一ところ曉の光ほのかに流れ
たるかも

わが門の小橋あやふし酔さびに川にな入り
そ佛師久慶

このあした心おだひにしづかなれば寒き冬
山もなつかしきかな

横須賀に打ち試るつつの音冬がれの山にひ
びきて寒しも

初春の八日の月の薄あかり松原ごしに波の
おときこゆ

日曜をおるる人多き驛まへの向つ松山の春
霞かな

遠くきこゆ此長閑なる春の日の畑中に人の
いひ争ふこゑ

日はしづみて茗荷の花の淡く黄なり夕習は
しの畑道ゆけば

上海の閘北ザポオの家に新妻にいづまの吾子あごは夕けのまう
けなどすらむ

蛙わの聲こゑ吾家わがめぐりて名越山長勝寺山暮れ黒
みたり

蒔まき時のおくれたればかも今にしてわが裏
畑のとまとの青さ

松山のすその杉森のこもり深み心しづもる
むかひつつあれば

長勝寺の朝太鼓の音おと朝空にすみてをひびく
秋づきぬらし

と見かう見みてをありしがひな雀日まはりの花につととまりたり

すさまじき嵐の後の青き空心おちゐてのぼる月みる

秋の夜の雨しとどふるに親しけれ畑のあなたの家
の燈火

みるともなく見てありし庭のしらじらしい
つよりか月は出でてをりけり

川原ひばとほくあなたにしかど日まはりの花のゆれの久しも

つういゝ赤とんぼが飛ぶ亂れとぶわが心
はたまじりてぞ飛ぶ

ゆふ雲の黄金ささべり光り照り向つ松山は
ほのあかみたれ

わが宿の背戸を行く川の水清き岸にぞ植ゑ
つる孟宗みき三株きき

書に勞れ窓を開けばさむざむと初春の夜の
月ぞ照りたる

聖ありし鎌倉の世に吾われあはずふりにし寺の
なきがらを見る(某院にて)

大き海青垣山にかこまるるわが鎌倉は實朝
を生みつ

谷門やどにおつるゆふ日ながめけむ萬葉まんじやうを訓よみ
かうがへし古へ人も(比企が谷)

常盤木終

大正十一年一月十二日印刷
大正十一年一月十五日發行

正價金貳圓

著者 兼發行者 佐佐木信綱

印刷所 東京市牛込區納戶町十六番地 長誠堂印刷所

發行所 東京市本郷區西片町十番地 竹柏會

發賣所 東京市神田區表神保町 東京堂書店

竹柏會同人著作書目

歌集

佐佐木信綱著 訂改 おもひ草 (七版)

正價 八拾五錢
郵税 八錢

同 上新 月 (四版)

正價 八拾五錢
郵税 八錢

松本初子著 藤むすめ (再版)

正價 七拾錢
郵税 六錢

白蓮著 踏繪 (六版)

正價 壹圓五拾錢
郵税 八錢

